

平成30年度企画展

発掘された 五所川原の遺跡

2018 2019
11.9(金)→2.24(日)



五所川原市・五所川原市教育委員会

ごあいさつ

五所川原市は、広大な美しい穀倉地帯である津軽平野の中央部（五所川原・金木地区）と中泊町南部を挟んで、北の十三湖一帯（市浦地区）に位置しています。

市域の西側には津軽平野の真ん中を優雅に流れる岩木川が北流し、河口の十三湖から日本海へ通じています。一方で東側には、津軽山地に囲まれた自然豊かな環境にあります。

しかし、自然環境は時代とともに目まぐるしく変化して、出来上がったものです。そのなかで、五所川原に暮らした人々は旧石器時代以来、自然環境に適応しながら、海・川・陸の幸の恵みを受けて暮らしてきました。

五所川原に生きた人々がどんな暮らしぶりだったのか、遺跡から発掘された出土品の展示を通じて知ってもらい、郷土に対する愛着、遺跡や文化財に対する興味と関心を高めてもらうことを目的に企画展「発掘された五所川原の遺跡」を開催します。

五所川原市教育委員会

年代	時代・時期	市内の代表的な遺跡	概要
約 30,000 年前	後期旧石器時代	福島城跡	針葉樹林における狩猟・採取生活 移動生活 氷河期の終焉
約 13,000 年前	縄文時代 草創期		落葉広葉樹林の形成 土器づくりが始まる 弓矢による狩猟が始まる
約 9,000 年前	早期		定住生活の開始 縄文海進の始まり、貝塚の出現
約 6,000 年前	前期	原子溜池（1）遺跡	円筒土器文化の始まり 大規模な集落の形成
約 5,000 年前	中期	オセドウ貝塚	大規模な貝塚の形成 円筒土器文化の終焉
約 4,000 年前	後期	観音林遺跡 五月女菟遺跡	十腰内文化の始まり 大規模な環状列石の出現 石棺墓の特殊葬送
約 3,000 年前	晩期	五月女菟遺跡 観音林遺跡	亀ヶ岡文化の始まり 華麗な土器と豊富な器種 漆文化の発達
約 2,300 年前	弥生時代		米作りの始まり
約 1,800 年前	古墳時代		寒冷な気候、続縄文文化との交流
約 1,300 年前	飛鳥・奈良時代	中島遺跡	蝦夷の地、律令国家の支配地外
約 1,200 年前	平安時代		集落の急激な増加
約 820 年前	鎌倉・南北朝・室町時代	五所川原産須恵器窯跡群 唐川城跡 十三盛遺跡	五所川原に日本最北の須恵器窯が出現 環濠集落（防衛性集落）の出現 郡郷制の施行（青森県域の内地的化）
約 430 年前	安土桃山時代 江戸時代	十三湊遺跡 檀林寺跡 福島城跡	鎌倉御家人の配置 安藤氏と南部氏の台頭・抗争 安藤氏の北海道進出 南部氏による支配と津軽氏の独立

今回紹介する遺跡年表



- ①オセドウ貝塚
- ②原子溜池（1）遺跡
- ③観音林遺跡
- ④五月女菟遺跡
- ⑤中島遺跡
- ⑥五所川原須恵器窯跡群
- ⑦十三盛遺跡
- ⑧唐川城跡
- ⑨十三湊遺跡
- ⑩福島城跡
- ⑪檀林寺跡
- ⑫山王坊遺跡

国土地理院 青森1:200,000(平成19年)をもとに改変

紹介する遺跡の位置

■ 五所川原の遺跡・歴史研究の歩み

「十三史談会」は大正 11 年（1922）12 月 22 日、十三湖を中心^{あいうち}に当時の相内村、内瀉村、十三村^{うちがた}の三ヶ村^{じゅうさん}の有志が集まり設立された。奥田順蔵^{おくだじゆんぞう}氏、福士貞蔵^{ふくしていぞう}氏^{あきもと}が中心となつて研究が進められた。大正 12 年 7 月 6・7 日、十三史談会の要望を受けて、北郡初頭教育研究会が相内村（五所川原市相内）で盛大に開催された。この研究会に合わせて行われたオセドウ貝塚の発掘調査（大正 12 年 6 月 20～25 日）によって、縄文人骨が出土した。

昭和 21 年（1946）8 月 21 日、前述の奥田・福士等が発起人となり、五所川原公民館仮庁舎で「津軽考古学会」が設立した。終戦後の混乱期に研究会を発足させ、目覚ましい活動が続けられた。その中で、本州北限の須恵器窯跡を発見したのは、3 代目会長の秋元省三氏^{すえきかまあと}であった。

その土壌の中で育った若い研究者が集まって「北奥文化研究会」が昭和 55 年（1980）4 月 4 日に設立された。設立以来、郷土誌『北奥文化』を毎年刊行し続けて、活動している。

1 オセドウ貝塚～円筒土器文化の貝塚～

所在地：五所川原市相内露草^{あいうちつゆくさ}
立地：十三湖北岸、北に相内川、南に十三湖に挟まれた台地西端部
時代：縄文時代前期・中期

縄文時代前期～中期にかけて形成されたヤマトシジミ（汽水産）を主体とする貝塚で、日本海側では大変珍しい。

大正 10 年（1921）、道路工事中に貝塚が発見され、広く知られるようになった。

大正 12 年、相内村民によって貝塚から伸展葬^{しんでんそう}による壮年男子の縄文人骨が発見された。この人骨発見を契機として、大正 14 年、長谷部言人^{はせべことんど}・山内清男^{やまのうちのがお}博士が 2 地点で分層発掘を行い、層位学^{そういがく}的研究方法を用いた土器の編年研究が行われた。

昭和 2 年（1927）、長谷部言人がオセドウ貝塚などで発見した土器を「円筒土器^{えんとうどき}」と命名するなど、学史に残る貴重な遺跡である。



大正 12 年に発見された縄文人骨

2 原子溜池（1）遺跡～円筒土器文化の集落遺跡～

所在地：五所川原市原子字山元^{はらこ やまもと}
立地：五所川原駅から南東約 8 km、原子溜池南岸の標高 30～40 m の台地上
時代：縄文時代前期・中期・後期

昭和 48 年に原子バイパス建設工事に伴い、青森県と五所川原市教育委員会がそれぞれ発掘調査を行った結果、縄文時代前期～中期の円筒土器、後期の十腰内式土器のほか、石器（石鏃・石匙・石槍・磨製石斧・半円状打製石斧など）が多数発見された。原子溜池周辺には、この他に原子溜池（2）・（3）遺跡など円筒土器文化の遺跡が密集していることから、この時期の拠点集落があったものと考えられる。



発掘された円筒土器

3 かんのんぼやし 観音林遺跡—縄文晩期の拠点集落—

所在地：五所川原市まつのき はながさ松野木字花笠

立地：五所川原駅から東へ約7km、松野木川右岸の標高約30mの河岸段丘上

時代：縄文時代後期・晩期、平安時代後期（10世紀後半から11世紀代）

昭和49年、昭和58年～平成3年に発掘調査が行われ、縄文時代後期前葉～中葉の竪穴住居跡2軒、土坑2基が検出された。晩期の遺構ははっきりしないが、多くの土偶や岩偶を含む晩期の遺物包含層（捨て場）が検出されていることから、晩期の拠点集落とみられている。なお、岩偶は今年、市指定有形文化財に指定された。

また、平安時代後期の竪穴住居跡26棟、土坑50基、井戸跡3基などが検出された集落跡でもある。

集落の外側には、空堀がコの字型に巡っており、古代の環濠（防衛性）集落の可能性が高い。



大量に出土した土偶

4 そとめやち 五月女菴遺跡—縄文晩期の祭祀場—

所在地：五所川原市あいうち相内

立地：十三湖の北西岸、日本海に面する標高約10mの砂丘上

時代：縄文時代後期～晩期、弥生・奈良・平安・中世

平成22～25年の発掘調査によって、縄文時代後期後葉～晩期後葉の土坑墓140基を検出し、約1,000年間にわたって墓が造られた祭祀場であることが判明した。また、台地頂部を取り囲むように、環状に土坑墓が分布（南北40m×東西60m）することが明らかとなった。

また、黄色粘土を盛ったマウンドを伴う土坑墓が多く確認されたことで、墓の上部構造が非常に良く分かる事例として注目を集めた。

さらに、墓には埋葬人骨を伴うもの、墓標（自然礫）を伴うもの、赤色顔料（ベンガラ）を伴う

もの、底面に溝を巡らすもの、幼児墓とみられる埋設土器なども検出された。副葬品では、ヒスイや緑色凝灰岩の玉類、小型の壺、耳飾り、石鏃、サメ歯が出土した。



マウンドを伴う土坑墓群

5 なかじま 中島遺跡—奈良時代の拠点集落—

所在地：五所川原市じゅうざんとさ十三土佐

立地：十三湖の北西に浮かぶ標高約3m、周囲約2.3kmの中島

時代：奈良時代（8世紀）

昭和27年（1952）、土砂採取が原因により、まとまって土師器が発見された。これらは東北地方北部における土師器編年の第一型式の標識資料のひとつとなっており、学史的にも重要な遺跡である。

土師器には甕・壺・坏・高坏の器種がある。甕は頸部にみられる多重沈線文様が特徴である。坏や高坏の特徴から8世紀前半頃に想定されている。津軽地域では奈良時代の遺跡は非常に少ない中で、十三湖周辺の中島遺跡からも同時代の土師器が発見されている。十三湖周辺の中島遺跡は奈良時代の拠点集落だったものとみられる。



中島遺跡出土の土師器（奈良時代）

6 国史跡 五所川原須恵器窯跡群

～本州最北の須恵器窯跡～

所在地：五所川原市高野、原子、持子沢、
羽野木沢、前田野目

立地：五所川原駅から南東に約10km、前田野目川に沿った標高30～200mの前田野目台地上に立地

時代：平安時代（9世紀末～10世紀）

平成10年（1998）から本格的な学術調査が行われ、これまでに計40基の須恵器窯跡が発見された。そのうち、保存状態の良好な窯跡13基が平成16年に国史跡に指定された。年代は平安時代中頃の9世紀末～10世紀にかけて須恵器生産が行われ、大きく4つの支群に分かれて分布し、変遷することが明らかとなった。それぞれ、①高野（KY）・桜ヶ峰（SM）窯跡支群、②持子沢（MZ）窯跡支群、③原子（HK）窯跡支群、④前田野目（MD）窯跡支群と呼んでいる。

また、五所川原産須恵器は、北は北海道のほぼ全域、南は秋田県北部及び岩手県北部まで流通していることが判明している。これは当時、律令制度が及ばなかった範囲であり、いわゆる蝦夷の地域であった。



MZ6号窯跡の完掘状況

7 十三盛遺跡～平安時代後期の低地集落～

所在地：五所川原市長橋字広野

立地：五所川原駅から北西へ約2km、岩木川と旧十川に挟まれた標高5mの沖積地に立地

時代：平安時代後期（10世紀後半～11世紀）

平成21・22年度、一般国道101号五所川原西バイパス建設に伴う発掘調査によって、平安時代後期（10世紀後半～11世紀代）の大規模な集落跡が検出された。主な遺構には、外周溝をも

つ建物跡、集落の北西部分を取り囲む柵列跡、多数の井戸跡に加え、集落全体を囲っていると思われる大溝跡が検出された。稲作を生業とする微高地上に営まれた低地集落の拠点の一つと考えられる。また、低湿地のため、大量の木製品が出土したことで注目され、当時の具体的な生活を知る上で大変貴重である。



十三盛遺跡の上空写真

8 唐川城跡～平安時代後期の高地性環濠集落～

所在地：五所川原市相内岩井 相内山国有林

立地：十三湖の北岸、標高140～160mの独立丘陵上

時代：平安時代後期（10世紀後半～11世紀）

平成11～13年度に富山大学によって発掘調査が行われた結果、築城時期が平安時代後期の高地性の環濠（防御性）集落であることが判明した。

山頂部の平坦面は土塁と堀跡によって、大きく3つの郭（北郭・中央郭・南郭）があり、東側に堀跡が巡っている。南北700m、東西200mと大規模である。南郭の調査では、井戸跡1基、竪穴住居跡2軒のほか、精錬炉跡1基を検出した。精錬炉跡からは輪羽口や多量の流動滓（鉄屑）が出土した。また、住居内から金床石や鍛冶関連遺物が出土し、鍛冶工房跡であることが判明した。

また、住居内からは土師器（坏・甕）、五所川原産須恵器（長頸壺・甕）、土錘のほか、北海道を起源とする擦文土器が出土した。



内郭の竪穴住居跡

9 国史跡 十三湊遺跡

とさみなと

～中世後期の北日本を代表する港湾都市～

所在地：五所川原市十三

じゅうざん

立地：十三湖の西岸、前潟と十三湖に挟まれた
標高約2～10mの砂州先端に立地
南北約2km、東西500mの範囲に及ぶ

時代：中世（鎌倉～室町時代・13世紀～15世紀中頃）

『廻船式目』(海商法)に三津七湊の一つとして
『おしゅうつがるとさみなと』(奥州津軽十三湊)とあり、津軽豪族の安藤氏が
拠点をおいて北方交易の港町として繁栄したとされながら、南北朝の津波壊滅伝承があり、長い間、
幻の港町とされてきた。

しかし、平成3年～16年までの学術調査の結果、13世紀初めに成立し、15世紀中頃に急速に衰退するまで、北日本屈指の大規模に整備された港町であったことが判明した。わが国において重要な港湾を備えた大規模で類いまれな遺跡として、平成17年に国史跡に指定された。



十三湊遺跡の上空写真



領主館地区の調査

10 福島城跡～十三湊安藤氏の方形居館～

ふくしまじょうあと

所在地：五所川原市相内実取

立地：十三湖北岸の標高約20mの台地先端部に立地

時代：旧石器・平安時代・中世（14世紀後半～15世紀前半）

福島城跡は内郭と外郭の二重構造になっており、内郭は土塁と堀を伴う一辺200mの方形居館で、外郭は三角形を呈する約62haの広大な範囲で、東辺には約1kmに渡って伸びる堀（防塁）を伴う。昭和30年に東京大学、平成4～5年に国立歴史民俗博物館、平成17～21年に青森県教育委員会が発掘調査を行っている。

平成17年以降の調査で、土塁や堀跡・区画施設・門跡といった福島城跡に関わる城郭遺構について重点的な調査が行われた結果、それぞれ十三湊安藤氏時代に構築されたことが明らかとなった。特に内郭から武家屋敷跡が検出されて注目された。

また、平成19年に内郭から旧石器時代のナイフ形石器1点・剥片が出土した。



福島城内郭の武家屋敷跡

11 檀林寺跡～中世十三湊安藤氏の宗教施設～

だんりんじあと

所在地：五所川原市十三

じゅうざん

立地：十三湖西岸、十三湊遺跡の南端部、標高約2mの砂州上

時代：中世（室町時代・15世紀中頃）

十三湊遺跡の南端、十三湖岸に面した場所に中世寺院檀林寺跡が存在する。この一帯は古くから「隠居跡」と呼ばれ、これまでに五輪塔・金銅製の懸仏・茶臼など数多くの宗教遺物が出土している。

太平洋戦争後に地元郷土史研究グループ「十三史談会」が調査をして、土塁跡や礎石跡（配石）を確認した。

昭和 51 年に早稲田大学、平成 14・15 年に青森県教育委員会が発掘調査を行った結果、室町時代の土塁・大溝・柵列で囲まれた屋敷跡のほか、墓域があることが判明した。平成 17 年度に国史跡に指定された十三湊遺跡「檀林寺跡地区」と呼んでいる。



検出された大溝跡

12 国史跡 山王坊遺跡

～中世十三湊安藤氏の宗教施設～

所在地：五所川原市相内岩井
 立地：十三湖北岸、山王坊川沿いの日吉神社境内地
 時代：中世（南北朝～室町時代・14 世紀中頃～15 世紀中頃）

現在、日吉神社がある山王坊川の奥まった谷間は山王坊と呼ばれ、遺跡は山林に囲まれた境内地にある。

昭和 57 年～平成元年の調査では、最奥の山中腹から奥院とみられる方形配石墓や幣・拝殿跡、石組階段跡が一直線上に配置されて検出された。また、平坦地では南北一列に並ぶ拝殿、渡廊、舞台、中門、瑞垣、本殿跡とされる社殿列跡の礎石建物跡が検出された。

平成 18～21 年の調査では、境内入口の西側から、3 棟の礎石建物跡が発見された。その内 1 棟が仏堂跡とみられている。このように、山王坊遺跡は南北朝・室町時代に繁栄を極めた神仏習合を如実に示す貴重な遺跡である。



仏堂跡の礎石

五所川原出土の珍品

ここでは、五所川原市からは発見された大変珍しい出土遺物・珍品を紹介します。

①大型磨製石斧（縄文時代）

五所川原市高野から出土した。長さは 49.4cm もあり、全国的にみてもこれほどの大型品は大変珍しい。

②玦状耳飾（縄文時代前期）

五所川原市原子山元から出土した。円筒土器文化の耳飾りで、五所川原市で初めて確認された。

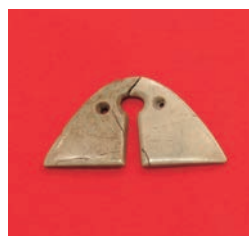
③横瓶／珍しいへら記号の須恵器（平安時代）

成田正行氏所蔵

五所川原市高野から発見された五所川原産須恵器である。横瓶は唯一のものであり、大変貴重である。また、珍しいへら記号をもつ壺である。



大型磨製石斧



玦状耳飾



横瓶



珍しいへら記号の須恵器

平成 30 年度企画展

「発掘された五所川原の遺跡」 展示図録

期間：平成 30 年 11 月 9 日（金）～平成 31 年 2 月 24 日（日）

主催：五所川原市・五所川原市教育委員会

共催：五所川原市観光協会

場所：五所川原市 立佞武多の館 2 F 美術展示ギャラリー

発行日：平成 30 年 11 月 30 日

編集・発行：五所川原市教育委員会

〒 037-8686 青森県五所川原市字布屋町 41 番地 1

TEL：0173（35）2111 Fax：0173（23）4095

表紙写真 上・十三盛遺跡の全景写真
下・十三盛遺跡出土の木製品